

こわい童謡 表の章

2007(平成19)年7月27日鑑賞<テアトル梅田>



監督・脚本＝福谷修／出演＝多部未華子／近野成美／悠城早矢／秦みずほ／しほの涼／霧島れいか／笠原紳司／堀有里／上野真未／水沢奈子（東京テアトル配給／2007年日本映画／74分）

……『表の章』と『裏の章』という2部構成にした狙いは、今回はじめて私が『シネマルーム』13と14を同時刊行したのと同じ……？ 進境著しい多部未華子がホラー映画初出演だが、童謡の歌詞の多義性や解釈の仕方によって見えてくる恐さにかこつけた乏しいネタだけでは、作品としてはとても……？ またこれでは、せっかく若い美女をたくさんセーラー服姿で登場させても、魅力が半減……。そこで私としては、『裏の章』まで観る意欲はとても……？

2部構成なら、私だって……

若者中心に大ヒットした『デスノート』（06年）は、前編と後編の間隔が約5カ月だったが、この『こわい童謡』は『表の章』と『裏の章』の2部構成とし、時を空けずに連続上映としたところがミソ……。

多部未華子主演の『表の章』（74分）では、合唱部員12名全員惨殺という悲しい結果になったことを受けて、安めぐみ主演の『裏の章』（79分）では、その謎解きが進められることに。

しかし、実はそれと全く同じ2部構成で同時刊行となるのが『SHOW - HEY シネマルーム』のパート13と14。すなわちチョイ不良オヤジ SHOW - HEY が映画で恋愛を指南する『パート13』はミュージカル・ロマンティック・コメディ編。これに対して、社会派弁護士 SHOW - HEY が映画で鋭く問題提起する『パート14』は話題の超大作、社会派エンターテインメント編。

こんな企画のメリットはうまくいけば2冊同時お買い上げになることだが、デメリットは、1冊買って面白くなければもう1冊は絶対売れないこと。しかして今日観た

『表の章』のくだらなさに参加してしまった私は、『裏の章』を観る意欲を全くなくしてしまっただが……。

若い美女がいっぱい登場するが……

もともとホラー映画嫌いの私がこの映画を観に行ったのは、株主招待券の有効期限が迫っていたことと、多部未華子以下若い美女がいっぱい出演するから……。しかも、舞台は名門のお嬢サマ学校だから、予告編に登場していたセーラー服姿の彼女たちは、おじさん族には魅力いっぱい……？

しかしホラー映画らしく、正木彩音（多部未華子）は冒頭から、時々聞こえてくる奇妙な幻聴のために頭を抱え顔をしかめているから、その魅力も半減……。しかも、まずは彩音のルームメイトの小川奈々香（秦みずほ）が、『かごめかごめ』を口ずさみながら校舎の屋上から飛び降り自殺をするわ、部長の染谷未紀（近野成美）がいなくなるわ、と美女たちに次々と災難が。さらに、未紀を探していた彩音は、トイレの中で『はないちもんめ』を口ずさみながらおぞましい姿のまま失踪する未紀の姿を目撃することに。

これでは、せっかくの美女が台なしだが、それはともかく、1つの童謡ごとに1人ずつ美女を消していくという手法はちょっと……？

名門女子校の風紀の乱れは……？

奈々香の後ガマとなった新ルームメイトの二宮紗世（しほの涼）は、彩音の「合唱部に入らない？」との誘いに二つ返事でオーケーしたが、何とその見返り条件は、「彼氏を部屋に入れるけど、内緒にしてね」というとんでもないもの。その挙げ句、紗世は合唱部の練習には参加しないわ、堂々と彼氏を連れ込んであえぎ声をあげるわという有り様だから、名門女子校のここまでの風紀の乱れにビックリ……。

そんな紗世も、『はないちもんめ』を口ずさみながら、男の胸を何回もめった突きにしたうえ、失踪してしまうことに……。こんなシーンを連続して目撃していく彩音の神経が、少しずつおかしくなっていたのは当然。そこで、彩音が図書館で『童謡綺談』を調べてみると、そこには……？

童謡の歌詞の多義性とは……？

此元和津也の原作漫画やこの映画が、童謡の歌詞の多義性に目をつけたのは慧眼。それは、「キジムナー」に焦点をあてた沖縄の『アコークロー』（07年）や、あまんじやく伝説をテーマとした『雨の町』（06年）などと同じ……。

私はよく知らないが、パンフレットにある民俗学者の長野隆之氏によると、歌や童謡の民俗学的な研究を進めていくと、各地方ごとに伝承されてきた歌の中には、歌うことで相手を呪ったり暗示にかけたりというものがあるのは当然らしい。もっともそれはごく一部で、病気を治すことなどに用いられることが多いとのこと。このように童謡の歌詞は多義的で、さまざまな解釈が可能だから、中には歌詞の中にある恐さを読みとることも可能……？ それが例えば、『かごめかごめ』や『はないちもんめ』『ずいずいずっころばし』では……？

物知り(?)の亜里砂も……

この映画は最近はやりの映画のつくり方をなぞったもの。まず、この映画に関するコミックは、2007年の第6回幻冬舎コミックス新人漫画賞、審査員特別賞を受賞し、『こわい童話』がデビュー作となった此元和津也のもの。そしてノベルは、福谷修監督がこの映画をベースに、この映画では描ききれなかった謎と恐怖に迫る『こわい童謡』。福谷修監督自身が「都市伝説」が大好きな人(?)だから、合唱部の部室を舞台とし、童謡をめぐる次々と起こる奇怪な事件には、それなりの言い伝えがセットされている。それが、この映画では「音楽室の呪い」のせい。

早々に合唱部を退部した真壁亜里砂(悠城早矢)の説明によると、幻聴が聞こえてくるとその歌詞の逆の言葉を唱えれば幻聴は消えていくとのこと。そんな単純なことで……と半信半疑の中、彩音はそれを試してみたが、そんな中、今度は亜里砂までもが、『ひらいたひらいた』の歌詞をなぞるように、蓮のツタに全身を締め上げられて惨殺されることに……。

もっとも、これら友人たちの惨殺される姿は、実は彩音にしか見えないようだが、それは一体なぜ……？

顧問の栗原先生も……？

この映画は、全寮制の名門女子校が舞台とあって、生徒たちは寮の中でもいつもきちんと制服を着ているのは立派……？ それに呼応するかのように、合唱部顧問の栗原美咲先生（霧島れいか）も、いつも正装で登場するのはさすが立派なもの……？

「かつての栄光を再び！」という思いでスパルタトレーニングを部員たちに課していることが、ひょっとしてこんな奇怪な事件が連続する1つの原因かもしれないが、映画では『表の章』のラストが近づくとつれて、この栗原先生にも異変が……。

そして誰もいなくなった……？

彩音が自分の目で見えてきたこれらの事件はすべて幻だったのか？ それを調べるべく、彩音は果敢に行動を起こしていったが、それは折にふれて相談をもちかけていった担任の男の先生岸本真（笠原紳司）が、全然まともに受け止めてくれないから……？

しかし所詮、1人の女生徒の調査能力なんてたかが知れているもの。彩音の調査活動中、遂にある日、合唱部の部室では……？

さあ、こんな謎をいっぱい残しながら、「そして誰もいなくなった」状態で『表の章』は終了することに。したがって、その謎解きに躍起となり、来週には必ず『裏の章』を観に行かなければ、と思うかどうかはあなた次第。さあ、そんな狙いにあなたは乗る……？ それとも……？

2007(平成19)年7月28日記